

いへり。

○府城濫觴

抑、金澤城郭の濫觴を考ふるに、其の初め後村上天皇の御世興國の頃ならんか、本丸の地に一字の佛堂を創立す。是堡障の權輿なりと云ふ。然るに後土御門天皇の御世長享二年、當國の領主富樫氏釋賊の爲に、二十三世の社稷を漚浪せられ、國民悉く本願寺の門徒と成り、彼の宗教に歸依し、本願寺の別院をば本丸の地に建立し、本願寺と號す。國民尊敬して金澤御堂と稱し、或は御山と呼べり。兵革守防の爲め塹形をなし、塀柵を築き、堡障とす。依りて江州山科より、本願寺の家老下間筑前賴善を呼び下して堡主となし、文龜元年武佐祐乘を山科より下して御堂坊主とす。斯くて洲崎慶覺坊以下の賊魁所々に割據して之を輔翼す。其の間凡そ八十餘年。下間筑前・七里參河・坪坂伯耆以下の賊魁共數名、次々城代をなし、加賀全國を押領して本願寺の所領とはなしぬ。依りて天正八年織田贈太政大臣信長公の命を奉じ、柴田勝家越前より出軍し、賊魁共を悉く討取り、當國を佐久間盛政に賜はり、盛政尾山を城郭に取立

付け、陰樋を以て城内諸曲輪の塹にそゞぎ、悉く水塹とせられたり。爰に於て城郭の内外稍、全備すといへり。蓋し當城の濫觴は、古老の傳説區々として一ならず。有澤武貞が金澤正極圖説に云ふ。金澤城の濫觴は、武州江戸城より五ヶ年早しと云ひ傳ふ。考ふるに、江戸城の初りは後花園天皇の御宇長祿元年丁丑築くと云ひ、金澤城は同御宇享徳二年癸酉にて五ヶ年前なりといへども、其の初め今本城の地に小御堂を建てたるは曆應・康永の頃と云ひ傳ふれば、百有餘年の後、享徳二年の頃に至りて、漸く城地と成りかたりと見えたり。而して後土御門天皇の御宇長享元年丁丑の頃、漸く城營堅く成りて、加賀の御山城と稱す。然らば曆應元年戊寅より見れば、百五十ヶ年を過ぎたり。享徳二年よりは三十五ヶ年の後たり。之によりて考ふる時は、享徳の頃より漸く城營の躰裁をなして、長享の頃に至り慥に城地と成りたるものなるべし。曆應元年戊寅より二百四十ヶ年の後、正親町天皇の御宇天正五年丁丑上杉謙信北國へ働きける時、萬里和尚を伴ひ茶臼山より金澤城を望み見、萬里和尚城郭の勝地たる事を賞美せられて、作詩あ

て、みづから城繩を改め、東方に塹を鑿ち、西方に正門を建て、初めて藩政の府城とす。然るに同十一年、江州志津ヶ嶽の戰爭に盛政擒と成り、秀吉公の爲に生管せられ、遺領をば前田家の祖利家卿へ賜はる。是に依りて能登七尾城より尾山城に遷り、高山南坊等伯に經始を命じ、改めて小坂口を正門となしたり。さて利家卿の命により、世子利長卿文祿元年加州戸室山より巨石共を伐出し、本丸以下諸郭の石壘を築かしめ、城地と小立野との間を研りぬき、地底に陰樋を設けて水條を引通されたり。慶長四年利家卿薨逝後、利長卿大阪より入部の處、大阪に於いて疑團を生じ、巷説紛々既に加賀征討の沙汰あるに依りて、再び高山等伯に命じ、城下の嶽垣を修し、内塹を鑿せしむ。同十五年に、三世利常卿尾州名護屋城經營の爲尾州に至り、普請役を勤めらる。于時國老篠原出羽守一孝金澤府城の留守を命ぜられ、留守中餘暇あるを以て外郭の總塹を鑿せしむ。今俗に云ふ惣構堀是なり。又寛永九年城内の水乏しきを以て犀川の河上、上辰巳村の地内より犀川の河水を塞き入れ、上辰巳・下辰巳の山腰を疏通して、小立野石引町通りに水路を

り。夫れより今享保十九年甲寅に到り百五十八ヶ年、曆應元年戊寅よりは凡そ三百九十七ヶ年に及び、享徳二癸酉年よりは二百四十七ヶ年、長享元年丁丑よりは二百十三ヶ年に及ぶといへり。元祿十五年石川郡御供田村の老農土屋義休直心入道が撰述せし讚美の記あり。左に載之。

金城隆盛私記

伏以。萬物蠢々焉。萬事芸々焉。無不有根本。無不有枝葉也。抑加陽金城。人傑地靈。遠近景勝。無不備矣。於南高祖宗廟。巍然固基於高德山。東西河流。汎々周仁澤矣。石壁累々。松柏鬱々。櫓門臺舍盈滿其中。城外備陽貌。城内兼陰繩。保合大和。乃利貞。國都篤泰也。當知。西高東低。則青龍地是也。遠以三州之地。應度之。則東越中小矢部川流。自刀利樽尾岬瀉出。至伏木之湊二十里。北則有能州寶達金山。南則有加陽末邑澤保。西則有北陸大路。貴賤大群。且此城圍繞海嶽於西南。地利全備。可謂四神相應之地也。何日建城於此。何年奉國命於此哉。萬年不變之地勢也。近加陽一邦之中。亦備此吉兆。謹察當城地形。神哉奇哉。正以白山爲根本。溪谷不絕。山巔山尾如葛藤連續。自絕頂巡